

心がけるべきこと三つ

松 本 啓二朗

竹市先生に最初にお会いしたのは、私が京都大学に入学してすぐに受講した一般教養科目「哲学」の授業を通してでした。その授業での先生の哲学に対する真摯な姿勢に感銘を受け、その後、二回生からは、旧教養部で開講されていた少数の基礎ゼミや文学部での授業に出席して、先生のご指導を受けました。そして、大学院人間・環境学研究科に進学後は、

先生の研究室の学生として、直接ご指導を受けることになりました。私たちは人間・環境学研究科の一期生でしたので、研究室に所属する学生の数が少なかったこともあり、懇切丁寧な指導をしていただきました。

さらにその後、人間・環境学研究科で先生の助手となり、ご研究や学生指導のお手伝いをしました。先生が京都大学を退官され、私が大阪教育大学に赴任してからも、折に触れ、ご自宅にお招きいただいたりして、さまざまなお話を伺う機会を得ました。

また、そのようないわば公の関係だけでなく、私自身の個人的な人生の問題にも、先生は親身になって相談に乗ってください、助けていただいたことも幾度もありました。そのようなことから、憚りながら私は先生を第二の父親のように思い、慕っておりました。

平成二十九年に先生が瑞宝中綬章を受章された際には、内藤可夫さんや安部浩さんといっしょに祝賀会を企画しました。その準備のために、先生のご自宅を幾度も訪問し、ゆっくりと先生の幼少時代や学生時代のお話を伺うことができたのも、よい思い出です。

このように学生時代以来の長きにわたりご指導を受け、懇意にさせていただいておりましたので、先生について思い起こすことは山ほどあるのですが、ここでは、先生との初めての出会い、つまり、一般教養科目「哲学」の初回の授業で先生から教えていただいたことを記して、改めて肝に銘じてお

きたいと思います。

「哲学」の初回の授業で先生は、これから哲学を学ぼうと思う者は次の三つのことを心がけて欲しいと仰っていました。

- 一、大きな哲学者に取り組むこと
- 二、現代のさまざまな問題に関心をもちこと
- 三、自分の問いを見つけること

私は京都大学で哲学を学ぼうと考えていたこともあって、先生の仰ったこの三つのことが、印象深く心に残りました。そしてその後、私は、哲学の勉強を進めていきながら、この三つのことが何を意味するのかを自分なりに考えてきました。まず、一つ目について。大きな哲学者に取り組むべきだと

言われるのは、哲学という学問の特性によっているところがあると思います。細分化されたそれぞれの領域を対象とする科学と異なり、哲学は人間と世界の全体を扱うものであり、そこで問われている問題は時代の新旧を問わないものであると言えます。そしてそうした人間と世界の全体を問う射程を有したものが、「大きな哲学」であり、「古典」と呼べるようなテキストだと思います。そのような大きな哲学に取り組むことによって、すなわち、そこで問われている根本問題を自ら問い直していくことによって、哲学を学ぶ者の思索のあり方が鍛えられていくことになるのだと思います。

そしてこのことは、狭い意味での哲学に限らず、「古典」を読むことによる教養教育ということにまで話を広げて考え

てみることもできるだろうと思っています。「古典」的なテキストには、時代の隔たりがあるにもかかわらず、それ自身がそれを読む者の思考の枠組みを形成しているという特徴があります。そのような「古典」を読み、解釈していくことによって、自己陶冶としての「教養」が実現されるのではないかと思っています。

次に、二つ目について。哲学の根本問題が時代の新旧を問わないものであるにもかかわらず、現代の諸問題に関心をもちべきだと言われるのは、哲学をする者も時代的な状況に制約されているということによると思います。哲学の問いもまた、そうした歴史的な制約のなかで問われていくしかありません。

もしかすると、先生が現代の諸問題に関心をもちべきだと仰っていたことには、現実の問題に目を向けない文献学的な哲学史研究に対する批判的な考えがあったのかもしれない。細分化された専門研究は、テキスト読解のためにはもちろん必要なことですが、哲学がそれだけに終わってはいけないということを、先生は力説していました。

しかし、現代の諸問題に関心をもちつつといっても、もちろん、流行を追ったり、あるいは世間的にもてはやされる話題を取り上げたりするということではないと思います。そうではなくて、現代という時代の諸問題のうちに目立たずに潜んでいる根本問題に目を凝らして、それを受け止めていくことが求められているのだと思います。

最後に三つ目について。先生は、日頃から、哲学において

は自分の問いを見つけることが大切だとくり返し仰っていました。三つのうちでもこれが最も重要なことだと言えるでしょう。しかし、同時に先生は、それは難しいことであるとも仰っていました。先生の導きにより哲学を学んできた私も、このことが分かってきたように思います。それでも、一つ目と二つ目の心がけ、これ続けることによって、自らの哲学の「問い」を磨いていくしかないと思っています。

以上のようなことは、もしかしたら先生の意図を離れて、私が勝手に考え進めたことかもしれません。しかし、それでもよいと思っています。私自身の哲学や学問に対する姿勢を決定づけたのはたしかに先生の言葉であり、それを引き受けて自分なりに考えていくこそが、先生の学恩に報いることになるだろうと思っています。